

アントレプレヌールシップとクリエイティビティプロセス

東出 浩教 教授

Email: hiro@waseda.jp

1) 担当教員の専門分野(研究領域)・現在の研究テーマ

ここでの研究の根底に流れるテーマは、「個人(時にはグループ)」が何らかのクリエイティブな活動にコミットするとき、どのようなプロセスを通じて:

- (1) 何らかのイノベーションや変化に繋がり、
- (2) 結果として、企業や組織のパフォーマンス改善が具現化されるか。
- (3) そして、コミットした個人にはどのような「Happiness」がもたらされるか、

というものです。

1つの有力な切り口としてEntrepreneurshipを取り上げています。この領域は、非常に学際的なもので、戦略・組織、ファイナンス、マーケティング等の経営ファンクションのみならず、心理学、人類学など様々なアプローチの交差点とも言えるものです。従い、今後の不確実な時代において、実務的な示唆を引き出すための研究対象は無限に存在しています。

現在の研究の焦点は、個人が持つアーティストックなinspirationやintuitionを、ビジネスの場において、どのように知覚し、最終的なvalue-addedな成果につなげていくか、そのプロセスにおけるintervention手法、にあてられています。

2) 指導方針

最終的なアウトプット(博士論文)においては、empiricalな一次データに基づく分析と議論が、当然ですが、必須となります。研究を進めていくのは皆さん自身であるという点は重要ですが、研究を理論的そして方法論的な側面からサポートしていくことは指導教員の責務でもあります。

研究プロセスを経て、新たな発見をして、その知見を社会に有意に還元・貢献していくためには、リサーチ・デザインとプロセスが方法論的に適切なものである必要があります。方法論は、量的(統計的)なアプローチと質的なアプローチに大別されます。研究プロセスの結果として、基本的なレベルでは両方のアプローチを理解し、研究において主たる方法として選択したアプローチに関しては、一層深い理解と運用力をつけていくことが必要となります。これが、グローバルに成果を発信していくベースとなっていきます。

3) 学生に対する要望・その他

期待していることは、ここでのresearch(研究)を通じて、re-search(search again)していく、つまり常に新しいものを模索し続けるという気持ちや行動パターンを再確認していただくことです。大切なことは、何かを知りたい・達成したいというモチベーションそのものであるといえます。従い、冒頭に述べた大きなテーマに共感を得ただけの限りにおいては、相当自由に研究テーマを選択していくことが可能となっています。英語運用力などのスキルも実際には相当に必要となります。しかし、ここでも大切なことは、現在そのスキルを持っているかではなく、身につけようとする強いモチベーションを持っているかです。